揺蕩う匿名
―『他人の顔』『箱男』の書く男／書かれる女の構造―

文化創造専攻 国文学専修
二〇〇〇三ＡＪＭ　野　呂　弥　生

修士論文要旨

安部公房は、しばしば「匿名性」をテーマに小説を書いている。「匿名性」は、ＳＮＳなどの人々の連絡および交流手段、防犯面などの観点から、都市化や機械化が進んだ現代社会においても身近なものである。しかし、誰もが身元を明かさなくても人々と関わることが出来る気軽さから、近年インターネット上の発言は過激になりやすいといった問題が頻繁に指摘されている。まだ都市化や機械化がそれほど進んでいない時期に文学において「匿名性」を描き出そうとした安部には、どのような狙いがあったのだろうか。また、どのように「匿名性」を描き出したのだろうか。本論文では、これらの問題について明らかにしていく。

一章では、『他人の顔』を扱った。その際、これまで主人公の「ぼく」が手記を最初から最後まで自作自演したのではないかという立場をとる。これは、今までに一度だけ疑いをかけられたことのある見方であるが、結局誰もこの立場から分析した者はいなかった。また、「ぼく」について分析を進める過程で、時代背景と結びつけ、週刊誌や美容事情から当時の人々の眼差し方を考察した。

二章では、『箱男』を扱った。箱男たちの管理下から柔軟に社会へ出て行った葉子と、彼女を求め続ける男たちを比較することで、葉子は「ようこ」であり、「はこ」として機能する人物であることを指摘した。『箱男』において、「葉子」の読みが指定されたことはないため、「ようこ」と読んできた読者の人の呼称に対する先入観が影響している箇所だと考えられる。

終章では、『他人の顔』の映画版と小説の違いを分析する。また、同じように主人公の記録がそのまま小説になったという形をとる小説であるにもかかわらず、『箱男』はなぜ映画化されなかったのかを考察した。そうすることで、見ることと書くことのそれぞれが持つ効果の違いについて分析し、それぞれの作品の「匿名性」の描き出され方について探った。

これらの作品が描き出す「匿名性」の、安部公房作品での位置づけについても考えている。